

日本学
研究叢書 6

現代日本語造語の諸相

林慧君 著

科技部人文社會科學研究中心補助出版

臺大出版中心
NATIONAL TAIWAN UNIVERSITY PRESS

目次

序章	1
第一章 日本語の外来語造語成分	13
第二章 造語成分における外来語と漢語の対照分析 —「オール」と「全」を例に—	49
第三章 字音形態素「風」の意味用法 —認知意味論による日・中対照分析—	77
第四章 字音形態素「風」の接尾辞的用法 —日・中対照分析を通して—	113
第五章 漢語接頭辞「反-」について —日・中対照分析を中心に—	143
第六章 外来語接頭辞「アンチ-」について	185
第七章 現代日本語外来語の実態について(I) —通時的な調査を通して—	209
第八章 現代日本語外来語の実態について(II) —語構成的な観点から—	235
終章	261

序 章

本研究の背景

語構成の問題を論じる際には、二つの立場からのアプローチができるが、その一つは語の発生的な見地から取り扱う「造語論的な見方」、もう一方は既に形成された語の構造を分析する「語構造論的な見方」である¹。が、事実上この語構成論の二つの見方は重なり合うところも多々あり、区別するのは難しいとよく言われる。例えば、次のような見地などが示されている。

齊藤(2005)には、

ある語が実際にどのような構造を有しているかという点は、その語がどのようなプロセスをへて形成されたのかということの結果であるから、両者は密接に関連する²。

とあり、また、野村(1992)にも、

造語という概念が語構造の分析と表裏をなすものであることは、いうまでもない。単語の構造を分析することによって、過去および現在の語彙がどのような方法で生成されたのかをしることは、将来の造語のありかたをさぐるうえで、

¹ 頼(2001)序章、秋元(2002)第5章、石井(2007)序論などを参照。

² 齊藤(2005)66～67頁。他に、宮島(1980)も参照。

きわめて重要である³。

と、語構造と造語(語形成)が如何に緊密な関わりをもつのが論述されている。本研究では、上掲の野村(1992)の考えに従い、将来の造語問題をも研究視野に入れつつ、現在のことばの構成を分析するという考え方に立ち、日本語の「造語」に関わるいくつかの事象について論究していきたい。

造語研究の際には、対象とする語を、如何なる構成要素が如何なる造語法に基づいて造り上げているのか、という問題意識を常にもつべきである。本研究では、特に日本語の中で非自立形態、即ち拘束形式の語構成要素⁴であるいわゆる「造語成分」⁵ また接辞による造語問題に着眼し、そのいくつかを取り上げて論じることにはしたい。

それから、本研究のもう一つの主な関心は現代日本語の外来語⁶であるが、これは著者が近年取りかかってきた研究課題の一つでもある。これまでの語構成・造語研究は、主に漢語・和語といった在来語を中心に行われてきており、管見の限りでは外来語の造語問題を取り上げた研究報告は未だ数少ないようである。

ところが、野村(1984)の、『現代用語の基礎知識』の1960年版と1980年版における見出し語の語種構造に関する調査では、

³ 野村(1992)4頁。

⁴ 形態論では「拘束形態素」とも言うが、単独で単語を成すことができない構成要素のことである。(『日本語学研究事典』189頁を参照)

⁵ 山下(1995)では、造語成分とは「語基から接辞へと連続的に位置する」中間的な構成要素と論じられている。基本的には本研究もこの考えに従う。

⁶ 本研究で言う外来語というのは、在来語の和語・漢語に対する洋語のことをさす。

1960年版では外来語と漢語とであまり差がなかったのに対し、1980年版では漢語は3割弱に減り、外来語は6割近くに増えていることが明らかになった⁷。このことは、現代日本語の中で外来語がとても無視できない位置を占めるようになったことを物語っている。

現代日本語における外来語語彙は、ただ外国からそのまま日本語として借用されるのに止まらず、更に日本語の形態素となって、他の語と結合するという造語機能をも果たしており、もはや日本語の造語や語彙体系に大きな影響を与えていると思われるので、日本語の造語問題を扱う本研究では和製外来語の造語問題も取り入れることにした。

先行研究

先行研究に関しては、各章でそれぞれのテーマと直接に関係のある先行考察を詳しく取り上げて説明するので、ここでは本研究に示唆を与えられた主要なものだけを概観しておくことにする。

造語の問題を分析するに当たっては、語がどのような方法(造語法)で、またどのような形で生成されるのかといった形態の側面が重んじられる。一方、語と言うのは形のみならず、(語彙的)意味ももち、文において働くわけであるが、このような語のもつ意味的側面も、造語の問題を考える際に欠かすことはできない。

⁷ 第七章の冒頭を参照。

語の意味的側面と語の構造をともに重視するという語構成論の立場を主張する研究は齊藤(1992、2004)が挙げられる。齊藤(1992)では、

筆者の語構成論において何より重要なのは、語構成を、語構成要素間の形式的な結合のタイプとしてのみ理解せず、語構成要素の意味と語の構造とが具体的に一語の中でどのように関わり合いながら語全体の意味を支えているのか、という、語の意味的側面と語の構造との複雑な絡み合いとして理解していこう、という姿勢である。従って、筆者は自らの語構成論を意味論的語構成論と仮称しているのであるが、……

と述べている⁸。このような考えに基づき、齊藤氏は下位単位の語構成要素が上位単位の語に質的転換するという「単語化」の概念を提出し、この単語化には、「意味的プロセス」及び「文法のプロセス」という二つの側面が存在している、と指摘されている⁹。

本研究においても、上記した齊藤(1992、2004)の、語構成の問題を扱う際、語の構造分析に語の意味的側面も取り入れるべきという考え方を基にして、論を進めることとしたい¹⁰。

次に、本研究で取り上げる現代日本語の造語成分または接辞

⁸ 齊藤(1992)19頁。

⁹ 齊藤(2004)第1章の1.2を参照。

¹⁰ 本研究の立場は、齊藤氏の、単語化による語彙的意味形成のプロセス、またアプローチなどとは異なることもあるが、造語の研究で形態レベルのみならず、意味的側面も重視する考え方は、齊藤(1992、2004)から学ぶところ大きかった。

に関する先行研究をいくつか挙げる。まず、接辞に関しては『日本語学 特集 接辞』（1986年4月号）が挙げられる。当論文特集では、字面通り、日本語の和語、漢語の接辞への考察がかなり網羅的に扱われており、例えば「うちー」「ーがましい」や「不ー」「ー式」などのようなケーススタディーもあれば、接辞の本質の問題、例えば、接辞の種類、機能、また構文論の観点から接辞への検討なども見られる。

これらの先行研究を通して、まず、接辞の意味用法とその接辞による造語の側面がかなり関わり合っていることに関する示唆を受けること多かった。また、当論文特集の中には、日本語と中国語の対照分析の論考（原由起子氏の「一的」、荒川清秀氏の「一性 一式 一風」）も含まれている。これらの研究は、多少の問題点が残されてはいるものの、接辞における日本語と中国語との対照分析の可能性とその必要性を主張している。本研究の特色の一つである対照分析という観点は、これらの先行研究より学ぶところが多かった。

それから、本研究のもう一つの分析対象である外来語の造語と関わりのある先行研究としては、特に山下(2006)を挙げたい。山下(2006)は、国語辞典を資料として作成した「造語成分データベース」を基にし、その中の外来語由来の造語成分について主に形態的特徴を論述したものである。

山下(2006)は、特に二つの点で参考になる。一つは、外来語造語成分を研究対象とした点と、論文末尾の「外来語造語成分出現頻度順表」の実態調査の資料である。外来語の造語成分とは何なのかの他に、辞書などで如何に扱われているのか、また、

形態的な側面における実態などが提示されている。特に末尾の外来語造語成分の一覧表はそれまでになかった外来語の造語成分に関する重要な基礎研究データであり、この造語成分の資料を基にし、外来語造語成分による造語の研究がどのように進められるか、その方向性も示唆してくれた。本研究の第一、二章で取り上げる外来語造語成分に関する考察も、それを参照することが多かった。

もう一つは、外来語造語成分の形態的な特徴、在来語の和語・漢語造語成分との相違点も示しており、外来語造語成分を和語・漢語の造語成分と比較分析することの可能性についても示されたことである。本研究の特色の一つである対照比較という観点からの考察はこれより大いに啓発されたと言える。

但し、山下(2006)は、外来語造語成分のデータを提示し、形態的な特徴を指摘するのみに止まっており、造語成分の意味的側面の問題には触れていないし、その造語に関しても詮索していない課題が残っている。本研究では、まず外来語の造語成分に関わる意味的側面や造語の問題を取り上げ、更に外来語の造語実態への分析にも取りかかることにする。

本研究の特色及び目的

本研究の特色は二つ挙げられるかと思う。一つは対照比較という観点からの考察であること、もう一つは意味的側面の考察も分析の視野に入れつつ、造語の問題に取りかかるということである。

一つ目の対照比較という分析観点であるが、本研究では、まず日本語内の対照比較、外来語と漢語の対照比較を行っており、例として類義語と思われる造語成分の「オール」と「全」、また、接頭辞「アンチ-」と「反-」を取り上げる。次に、日本語と中国語の対照分析も行うが、主に、いわゆる日本語と中国語の「同形」語に焦点を絞り、例として同形の接尾辞「-風」、そして接頭辞「反-」を取り上げる。このように、日本語内の異なる語種の類義語どうしへの対照比較に止まらず、更に外国語との対照比較も研究視野に入れることが本研究の大きな意義の一つだと言えよう。この多面的な対照比較の分析観点を通して、日本語の造語の問題をより広く客観的に捉えられると考える。

二つ目は、造語分析の際に意味的側面も視野に入れることである。上に述べたように、本研究では類義語どうしの造語成分、また日・中両語¹¹同形の接辞を分析対象に取り上げるが、これらの造語の問題を考察する際に、その意味の類似性や相違点などを解明することも必要になってくる。なお、意味と語形との関わりを明らかにするために、これらの造語成分や接辞について、その語の構造、形成といった語形の側面のみならず、意味的側面における分析もともに行う。語形と意味を両方とも重視するところにも、本研究の大きな意義があると思われる¹²。

次に、本研究の目的について、主な二つの分析対象ごとに述べよう。

¹¹ 以下、本研究では日・中両語とは日本語と中国語のことをさす。

¹² 頼(2001)も、意味的側面をも考慮しつつ形容詞の語構成論的研究を行ったものである。頼(2001)5頁を参照。

まず外来語という分析対象に関して、第一章では、「アイス」をはじめ、「カー」などの、従来あまり本格的に研究分析に取り上げられなかった外来語造語成分についてその造語の様相を考察する。その外来語造語成分が在来語の和語や漢語とどのような競り合いをもちながら、日本語の造語に如何なる影響をもたらすのか、といった問題を明らかにしたい。なお、第七、八章では外来語全般の造語実態の調査に取りかかるが、通時的な実態調査を通して、ここ 30 年における外来語の造語実態などを垣間見たい。その実態などから、現代日本語の外来語の造語の諸相を把握したい。

次に、もう一つの分析対象となる造語成分と接辞に関しては、前述したように、主に対照比較という観点から分析に取りかかるが、まず、外来語造語成分と漢語造語成分(「オール」と「全」、「アンチ-」と「反-」)に関して、意味的側面における類似点や相違点を考察しつつ、意味と造語との関わりを解明する。そして、日本語と中国語における同形の接辞の問題(「-風」と「反-」)に関しても、両者における意味の異同、またそれと造語との関わりなどを明らかにしたい。即ち、いくつかの造語成分と接辞の造語問題を扱うケーススタディーを通して、日本語における外来語と漢語、更に日本語と中国語における造語の異同等をより客観的に探っていきたい。

本研究の構成

本書は、序章と終章も含め、第一章から第八章までの全10章からなる。序章では、まず本研究の背景を述べ、そして関わりのある主な先行研究を概観する。次に、本研究の分析の特色を説明し、本研究の目的及び構成を記述する。

第一章から第八章までが本研究の本論に当たる部分である。分析の手法によって大きく二つに分ければ、第一章から第六章までは、外来語造語成分や漢語接辞などの造語問題に関して意味と語形という二つの側面から分析する。一方、第七、八章は、和製外来語について実態調査という方法を通して、ここ30年現代日本語における和製外来語の造語実態を論述する。

以下に、第一章以降の内容を略述する。

第一章では、「ホーム」や「ニュー」などのような、本来外国原語では自立形式の形態素であるものの、日本語に借用されると、自立用法を失い、結合専用のいわゆる外来語の造語成分になるものを取り上げ、その語構成的な特徴や要因などについて、外国原語の文法性と意味上対応する在来語成分との関わりから論じる。

第二章では、第一章に引き続き、造語成分を分析に取り上げる。外来語と漢語の対照比較という観点から、類義語どうしと思われる外来語造語成分「オール」と漢語造語成分「全」を例に対照分析を行うが、両者の意味用法、語構成における異同、文脈構文上の特徴などを明らかにする。

第三章及び第四章では、日本語と中国語との対照分析である。

日・中同形の字音形態素「風」を取り上げるが、まず、第三章では、認知意味論の観点からのアプローチを通して、合成語の後項要素として「風」の日・中両語の異同を考察する。「-風」の接尾辞的用法にも少し触れるが、全体として「強風」や「誹風」などのような「-風」の語基的用法を中心に論じる。

第三章に引き続き、第四章でも、字音形態素「風」を取り上げるが、「外国人風」や「お茶漬け風」などのような接尾辞的用法を中心に日・中両語の意味用法や構文的機能の相違、特徴などを論述する。

第五章及び第六章では、漢語接頭辞「反-」と外来語接頭辞「アンチ-」を取り上げる。まず、第五章では、日・中対照分析のアプローチによって、いわゆる日・中同形の漢語接頭辞「反-」の意味用法と語構成という二つの側面における日・中両語の類似点や相違点などを考察する。

第六章では、第五章に引き続き、「反-」と類義語どうしと思われる外来語接頭辞「アンチ-」を中心に取り上げ、その意味用法や語構成の問題を論じようとする。そして、第五章の、日・中同形漢語接頭辞「反-」に関する考察を踏まえ、日本語と中国語の接頭辞「反-」と日本語の「アンチ-」との間に如何なる異同が見られるかという対照分析も視野に入れ、三者の相違点や特徴などをより深く論究する。

第七章及び第八章では、ここ30年の和製外来語の実態調査を通して通時的な考察を行うものである。まず、第七章では、定期的に毎年発行され、言葉の様相の変化を縦断的に把握できる『現代用語の基礎知識』の付録外来語年鑑を調査資料と限定し、

和製外来語のみを考察の対象として取り上げ、調査・分析する。そして、外来語辞典も用いて、同年鑑と辞書における収録状況の異同などを比較することによって、ここ30年の和製外来語の消長実態や語彙の性質、また外来語辞典の性格などを考察する。

第八章では、第七章での和製外来語に関する通時的な調査に基づき、数量的な変化や造語法から、ここ30年の和製外来語における造語実態の特徴などを論述する。

最後の終章では本研究のまとめを行い、本研究の意義と今後の課題を示す。